

地域と一体となった人間関係づくり

ー中山間地域における小・中連携の在り方ー

いの町立本川中学校 教諭 西山浩生

中山間地域においては、過疎化・少子化の影響により遊びや体験の機会が減少し、子ども同士のかかわりが少なくなったため、自己有用感をはぐくみにくい状況がある。そこで、本研究では、地域の実態に応じた小・中連携の在り方の一つとして、小・中学生の異年齢交流による人間関係づくりの授業を行った。その活動を通して、自己有用感をはぐくむと共に、他者受容の促進を目指した実践を行い、その効果について分析した。併せて、保護者や地域住民の思いと願いを把握し、学校と共有することで、地域との協働による学校づくりを目指すために、どのような取組をしていけばよいのかについて提案する。

キーワード：小中連携、異年齢交流、自己有用感、人間関係づくり

1 はじめに

現在、中山間地域においては、少子化の進行に伴い学校の統廃合が進行し、校区が広がると同時に、地域における子ども同士の遊びや体験の機会が乏しくなっていると考えられる。そのため、少人数の集団の中で人間関係が固定化される傾向があることに加え、子ども同士のかかわりが少なく、人間関係が十分に構築されていない状況が見られ、互いに深くかかわり合うことができない実態もある。また、生活の都市化によって大人と子どものかかわりも減少すると同時に、人とのかかわりという点において、コミュニティとしての機能も低下しつつあるように感じる。

こうした現状を踏まえたうえで「中山間地域の教育の振興」を進めるにあたり、上記のような課題の改善につながるような取組を提案・実施する必要性があると考えた。その際、まず子どもたちが自己有用感や受容の心を獲得する有効な手立てを考察することとした。そして、そうした取組を保護者や地域住民と共有していくことで、地域と学校が、一体となって地域の子どものたちの社会性や対人関係能力の育成・伸長を図る取組のきっかけとしたいと考えた。

2 研究目的

小・中連携において異年齢交流の活動を中心に、計画的に児童生徒がかかわる機会を設定し、従来、家庭や地域の中ではぐくまれてきた自己有用感を児童生徒が獲得すると共に、他者受容の促進を目指す。そのために、「ピア・サポート・プログラム」の考え方を取り入れ、小・中学校間で同じ視点を持つと共に、児童生徒による異年齢交流の活動を提案する。また、そうした取組の実際や手法を保護者・地域住民と共有することで、学校と地域との協働による学校づくりの在り方を検証する。

3 研究内容

(1) 人間関係づくりを基盤とした小・中連携

A中学校では、少子化に伴い、平成14年度より山村留学制度を取り入れており、現在も県外から生徒を多数迎えている。学級、さらに学校全体として生徒数が確保されることで、学習面や部活動、各行事等において活性化が見られる反面、生活の中でお互いを知る機会や場面が限られており、人間関係の広がりや深まりという点では課題が残されているように感じている。そこで、校区内の児童生徒の生活実態を把握し、個々への理解を深めるための方法として、小学校第4学年から中学校第3学年を対象にアンケート調査を実施することとした。その結果をもとに、小・中連携の在り方と、地域の児童生徒の実態に合った取組を提案・実施することとした。

① 「ピア・サポート・プログラム」の考え方を取り入れた小・中連携

「ピア・サポート・プログラム」の考え方は、次のように要約できる*1。

子ども同士のかかわり合い（他者を介しての実体験）を通して、一人一人が自己有用感を獲得することで、子ども自らが発達、成長することができる「学校づくり」を目指すもの。

② 各学年における人間関係づくり

中学校第2学年を中心に、個々の社会性や対人関係能力の育成を目指すため、異年齢交流の活動を視野に入れつつ、帰りの学級活動（以下、終学活とする）で下表のような短時間の活動を継続的に実施し、併せて日々の生徒の様子を観察した。活動内容は、構成的グループエンカウンター（以下「SGE」）、心の冒険教育（以下「PA」）の手法を取り入れたプログラムを中心に構成した。

| 回 | 日時 | 対象学年 | ね ら い | 主な内容（P：「PA」、S：「SGE」） |
|----|-------------------|------|-------------------------------|-----------------------------------|
| 1 | 9月7日（金） 終学活 | 第2学年 | 他者への配慮のある話し方、伝え方、聞き方を確認し合う | (P)バースデーライン、ラッキー7 |
| 2 | 9月11日（火） 終学活 | 第2学年 | 小グループで協力して1つの作業を行う | (P)宝さがし |
| 3 | 9月13日（木） 終学活 | 第2学年 | 前回より多い人数のグループで協力して1つの作業を行う | (P)ヘリウムフープ |
| 4 | 9月20日（木） 終学活 | 第2学年 | 行事に向け、互いに思いを伝え合い、学級としての意識を高める | (P)ネームトス |
| 5 | 10月2日（火） 終学活 | 第1学年 | 自己を表現するとともに、他者理解を深める | (P)Have you ever? |
| 6 | 10月4日（木） 終学活 | 第1学年 | 1つの答えを導き出すため、グループ内で協力する | (S)聖徳太子ゲーム |
| 7 | 10月10日（水） 終学活 | 第1学年 | 自己の思いや考えを他者にはっきりと伝える | (S)あわせアドジャン |
| 8 | 10月12日（金） 終学活 | 第1学年 | 自己の思いや考えを表現し、伝えることで仲間と共有する | (S)アドジャン |
| 9 | 10月15日（月） 終学活 | 第2学年 | ルールを意識しつつ、自己理解と他者理解を深める | (P)あわせてポン |
| 10 | 11月7日（水） 第3校時 | 第2学年 | 人間関係づくりの目的の共有と、リーダーとしての意識付け | 【異年齢交流の準備】目的説明、グループ分け、活動内容の説明 |
| 11 | 11月16日（金） 第6校時 | 第2学年 | 活動目的の共有と、グループ内での信頼関係づくり | 【異年齢交流の準備】活動内容の話し合い及び決定 |
| 12 | 11月27日（火） 第6校時 | 第2学年 | 全体での活動内容の共有と、学級としての一体感を持つ | 【異年齢交流の準備】活動内容の確認、グループによる活動のリハーサル |

③ 異年齢交流（小中合同による活動）の実施

日ごろは合同での活動が少なく、一緒に遊ぶ機会も限られている小・中学生が、異年齢交流の活動を行うことで、自己有用感を獲得することを目指した。自己有用感とは、「他者との関係で自分の存在を価値あるものと受けとめられる感覚」のことで、多様な他者とかわる実体験をもとに獲得できるとされる。他者をサポートする活動や他者の役に立つ活動を通して、「役に立てて（認めてもらえて）うれしかった」、「必要とされていると感じた」などの感情を持つことで獲得され、それがあると、主体的に他者や社会とかわろうとすることができる、とされている*2。

そこで、他者とかわる適切な機会を教員（大人）が計画的に準備し、その中で児童生徒のかかわり合いや振り返り等で思いを共有することを通して、相互の影響を引き出すこととした。

| 回 | 日時 | 対象学年 | ねらい | 主な内容 (P:「PA」、S:「SGE」) |
|---|-----------------------------------|------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 7月10日 (火) 第3校時 | 小学校第5・6学年 中学校第1学年 | 小5: 合同の活動を通して、日ごろ交流の少ない中学生とも親しくなる。 小6: 合同の活動を通して中学生とも親しくなると同時に、他者のよさを発見する。 中1: 小学生と親しくなると同時に、互いのよさを見付け合う。 | ①(P)あとだしじゃんけん ②(P)ビート ③(P)エブリボディアップ ④(P)星旅行 |
| 2 | 10月30日 (火) 第5、6校時 (検証授業) | 小学校第5・6学年 中学校第1・2学年 | 小5: 他者の存在やルールを意識して活動に楽しく参加し、自分の思いや考えをわかりやすく伝える。 小6: 活動の中で他者の存在やルールを意識すると共に、自分の思いや考えを適切に表現し、わかりやすく伝える。 中1: 他者の存在や規律の中で個々のよさを見付け、個に応じた対応の仕方や行動を考える。 中2: 他者の存在や規律の中で個々の多様性を認め合い、個に応じた対応の仕方や行動を考える。 | ①(S)君こそスターだ ②(P)マンモスのきば ③(P)フープリレー ④(P)パイプライン |
| 3 | 11月29日 (木) 第5、6校時 (検証授業) | 小学校第5・6学年 中学校第1・2学年 ※第2学年が4グループに分かれ、全員がリーダーとして活動を行う。 | 小5: 他者とのかかわりに喜びを感じ、集団内での自他の存在の大切さに気付く。 小6: 他者とのかかわりに喜びと自信を感じ、集団内での自他の役割や存在の大切さに気付く。 中1: 他者とのかかわりに自信と喜びを感じ、互いの存在の大切さを理解する。 中2: 個々のよさを認めつつ、他者とのかかわりに自信と喜びを感じ、互いの存在の大切さを理解する。 | ①(P)グループジュエチャー ②まもる君ゲーム(生徒が考案したオリジナル) ③(S)絵画リレー ④(P)風変わりなベースボール |

(2) 地域との協働を目指した学校づくり

- ① 「『地域』について」アンケート調査による、地域住民の意識等の実態調査
- ② 保護者や地域住民への聞き取りによる、地域の実態のより具体的な把握
- ③ 学校と地域との協働を目指すための、学校からの具体的な取組の提案

4 結果と考察

(1) 人間関係づくりを基盤とした小・中連携

児童生徒の生活実態を把握するために実施した「生活のようす」アンケート調査(平成19年7月実施、小学校第4～6学年:15名、中学校第1～3学年:30名対象)の結果をもとに、地域の児童生徒の実態として、次のような結果が得られた(表1～6、一部抜粋)。

表1 平日の放課後・休日の過ごし方(小学生)

| 項目 時間帯 | 自分の家 | 友だちの家 | 運動場 | 自然のあるところ |
|-----------|------|-------|-----|----------|
| 平日の放課後 | 4人 | 2人 | 8人 | 3人 |
| 休日 | 9人 | 5人 | 1人 | 8人 |

表2 平日の放課後・休日の過ごし方(中学生)

| 項目 時間帯 | 自分の家・寮 | 友だちの家 | 運動場 | 自然のあるところ |
|-----------|--------|-------|-----|----------|
| 平日の放課後 | 21人 | 1人 | 2人 | 3人 |
| 休日 | 17人 | 1人 | 4人 | 5人 |

表3 悩みごとを相談できる友だち

| 学年 | 選択 いい | 1人 | 2～3人 | 4人以上 |
|-----|----------|----|------|------|
| 小学生 | 1人 | 2人 | 5人 | 7人 |
| 中学生 | 5人 | 3人 | 15人 | 7人 |

表4 違う意見をもった人とも仲良くなる
できる

| 学年 | 選択 とてもそう | まあそう | あまりそう ではない | ぜんぜん そうではない |
|-----|-------------|------|---------------|----------------|
| 小学生 | 1人 | 2人 | 5人 | 7人 |
| 中学生 | 5人 | 3人 | 15人 | 7人 |

表5 友だちと話が合わないと不安に
感じる

| 学年 | 選択 たくさん あった | ときどき あった | あまり なかった | ぜんぜん なかった |
|-----|-------------------|-------------|-------------|--------------|
| 小学生 | 3人 | 2人 | 6人 | 4人 |
| 中学生 | 3人 | 14人 | 11人 | 2人 |

表6 かくれんぼやおにごっこをして
遊んだこと

| 学年 | 選択 とてもそう | まあそう | あまりそう ではない | ぜんぜん そうではない |
|-----|-------------|------|---------------|----------------|
| 小学生 | 6人 | 1人 | 4人 | 4人 |
| 中学生 | 7人 | 13人 | 8人 | 2人 |

こうした結果から、主に次のような課題が考えられた。

- 学年が上がるにつれて、平日の放課後、休日ともに自宅（寮を含む）で遊ぶことが多くなり、友だちの家で遊ぶことは少なくなる。休日でも、大勢で屋外等で遊ぶことは少ない。
- 小集団の中で、日ごろよく話をしたり一緒に遊んだりする友だちや、悩みごとを相談できる友だちがいない児童生徒がいる。
- より小さな集団に固執し、学年が上がるにつれ、違う意見を持った人を受け入れにくいという傾向が強まると共に、友だちと話が合わないと不安に感じたり、仲間はずれにされないように話を合わせたりする人数が増える。
- 「かくれんぼ」や「おにごっこ」など、大勢で遊んだ経験が、学年が下がるにつれて減少傾向にあると共に、様々な経験が少ない児童生徒が多く見られる。

これらのことから、少人数の学校の多い中山間地域において、児童生徒に社会性や対人関係能力の育成を図っていくためには、できるだけ多くの児童生徒がかかわり合い、その中で多様な他者の受容を目指した人間関係づくりの取組が必要であると考え、以下の取組を提案・実施した。

① 「ピア・サポート・プログラム」の考え方を中学校から取り入れる

これまで、小学校での算数の授業における T.T や小中合同での学校行事など、小・中連携の取組の中に、「ピア・サポート・プログラム」の土台となるものは存在していたと考えられる。今回は、まず中学校の教員と学習の場を持ち、次のような考え方の具体の導入について、小・中連携につなげるよう検討し、意見交換を行った。

ア 人間関係づくりを進めていくのは、子ども自身である。そのためのきっかけを大人が与え、場を設定するが、ある程度の段階からは子ども自身の成長を見守る役に徹する。

イ 学校全体、教職員が連携・協力し、相互の共通理解のもと、活動を実施していく。

つまり、これまで当然だと考えられてきた視点をはじめ、日々の取組の一つ一つについて、教職員で再確認するということである。実際には、理論や活動の具体について個人的に調べようとする教員も現れ、職業体験（第2学年：10月）や福祉体験（第3学年：10月）の際には、上記の視点から生徒に接してくれるなど、少しずつではあるが広がりを見ることができた。

② 各学年における人間関係づくり

学年団の教員と情報交換を行いつつ、日々の指導において、人間関係づくりに関する活動を随時行っていただいた。その関連も含め、6月、12月に実施した「楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U」（以下 Q-U）の結果を、客観的な参考資料として分析・考察し、活用した。

ア 取組での主なねらい（第2学年での事例）

- 適度に体を動かすことで気持ちをほぐし、その中で仲間との信頼関係を構築する。
- 自己理解、他者理解を深め、多様性を受け入れる心情をはぐくむことにつなげる。
- 自己表現を含めた、他者への配慮のあるコミュニケーション能力の向上を図る。

これらのことを教員間で共有するようにしたことで、日々の指導の一貫性にもつながり、教員と生徒との人間関係づくりにもつながった。

イ 生徒の変容（第2学年での事例）

活動内容を「少人数→全体」の流れで計画し、生徒たちにとって、相互の信頼関係を少しずつ構築していけるようにした。また、仲間や教員から活動や発言を認めてもらう場面を意識して創出した。そのことで、各自が自信を持つことができ、二人組や小グループでの活動を通して、思いや考えを仲間に伝えることにも徐々に慣れていった。さらに、少人数での協力から、互いに配慮を意識した言動が見られるようになるなど、他者へのかかわりが高まり、相互のよさを認める場面が増えてきた。それに並行して、教員間において随時、情報交換を行ったことで、生徒へのかかわりに一貫性が持てるようになった。

【承認得点の変容】（「Q-U」の結果から）

「男子A」：35→41、「男子B」：25→36、「男子C」：24→35

同じ傾向を示した、いずれの生徒にも共通して、特に向上した項目が「友人から認められていると思う」であった。以上のことから、周りから認めてもらうことが、他者受容の促進にとって重要な要素の一つになっているということが言える。また、生徒の変容に向けて、そうした姿勢と行動を、教職員がモデルとして示していくことも重要であると考えられる。

③ 異年齢交流の活動

対象となる小学校第5学年から中学校第2学年の全員に対して、「自己有用感を測るアンケート」*3を並行して実施し、他者に対して主にサポートする立場になる中学生（特に第2学年）を中心に、自己有用感の獲得状況を見た。活動においては、児童生徒の親近感を高め、信頼感を構築することも目的の一つとして加味し実施した。

ア 各学年における、児童生徒の変容の傾向（「自己有用感を測るアンケート」の結果から）

- A 「友だちにたのまれたことは、できるだけやってあげようとしている。」
- B 「私のまわりには、私のことをわかってくれる友だちがたくさんいる。」
- C 「私は、誰かに、何かの役に立っている。」

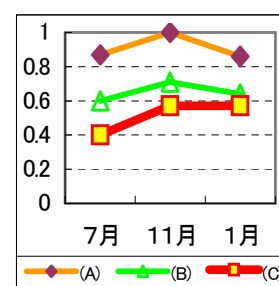
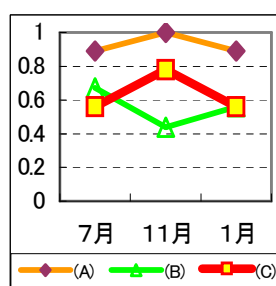
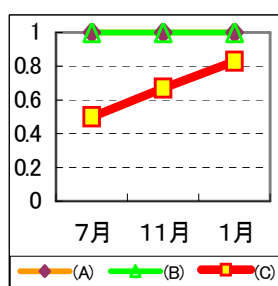
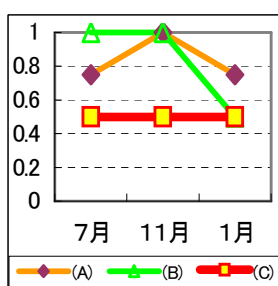


図1 第5学年

図2 第6学年

図3 第1学年

図4 第2学年

（図中の数値軸の数字：設問に対して「はい=1」、「いいえ=0」として集計した各学年の平均）

Cの項目を中心に、活動を通して自己有用感の獲得について、次のような傾向が考えられる。

- 「誰かに、何かの役に立っている」との感覚は、異年齢交流の活動によってはぐくまれる。
- 活動後も、日常的に教員が「自己理解を深める」、「一人一人を認め合う」との視点で児童生徒にかかわり、「他者とのかかわりを意識した活動」を実施することで、児童生徒の「誰かに、何かの役に立っている」という意識が高まり、自己有用感は継続して獲得、維持できる。

この傾向は、2回の検証授業後の振り返りを比較すると、児童生徒の記述に次のような変化が見られたことから、うかがわれた。

- 「うれしい」や「やりがいがあった」など、他者とのかかわりを通して役に立ったと感じたり、必要とされていると感じたりする自己有用感の高まりにつながる表現が、特に中学校第2学年に見られた。
- 「(他者と…ができて) よかった」という、他者とのかかわりを通して、自他の双方に対して肯定的に受けとめる表現が、小学校第6学年、中学校第2学年に多く見られた。

第2学年では、他者とのかかわりを通して感じた、達成感や成就感、あるいは、「誰かの役に立った」、「必要とされている」と感じた場面が他学年に比べて多く、その経験が生徒たち一人一人に定着していったと考えられる。また、第6学年においては「生活のようす」アンケート調査から、「違う考えや年齢の人を受け入れる意識が高い学年」、という傾向が見られた。加えて、小学校の中では最年長という位置付けが、日ごろの活動の中で生かされたと考えられる。

一方、第5学年では、「(…してくれて) うれしかった」という受動的な感想が多く見られた。また、第1学年では、



写真1 小中学生での「フープリレー」

「(他者と…できて) 楽しかった」という感想が多かったが、自己有用感の継続とまでは至らなかった。これは、第2学年のような、「誰かの役に立った」、「必要とされている」と感じられる場面が少なかったからだと考えられる。

イ 異年齢交流の活動の効果

小・中学生の異年齢交流の活動における効果については、次のことが言える。

中学生にとって、小学生など他者とのかかわりを通して、「誰かの役に立っている」という気持ちを持つことで、自信につながる。そして、自分の存在や行動が、他者にとって意味のあるものだと感じられるようになり、自己有用感が高まる。そのことで、他者に対する積極的、主体的な行動や配慮が高まり、他者受容につながる。このことは、特に年長者で著しく、第2学年の振り返りシートからも読み取ることができる(表7、8)。

また、小学生の側からは、全体的に、中学生に対する「心の距離」が縮まると共に、信頼感や安心感が高まると言える。特に第6学年で見られたが、第5学年では表9にあるように、将来展望に対する意識の高まりが見られた。

ウ 教員の観察からあげられたこと

- 自分に自信を持ち始め、他者に無理を言わないようになってきた(中学生)。
- 他者への配慮が見られるようになり、他者への声かけが、上手になってきた(中学生)。
- 相手を受け入れるという意識が高まり、下級生へのかかわりを見ていると、中学生の存在が、今まで以上に大きくなったようだ(小学生)。
- 山村留学生の一人一人を、今まで以上に知る機会になった(小学生)。

このように、小学生(下級生)にとっても、異年齢交流の活動は自己有用感の獲得につながっていると言える。以上のことから、小・中学生による異年齢交流の活動は、少人数の集団において生活上の経験不足を補うと共に、人間関係の幅が広がり、他者に対する積極的、主体的な行動や配慮が高まることから、他者受容の促進に有効であることが示された。

(2) 地域との協働を目指した学校と地域との連携

① 地域の実態、地域住民の思いを把握する

「『地域』について」アンケート調査(平成19年7月～10月実施、A中学校区全戸の16歳以上[高校生を含む]を対象・配布。回答:177人。ただし、無回答等の設問のあるものも標本とした)から、地域の実態、地域住民の思いなどについて、次のような結果が得られた(一部抜粋)。

ア 地域の「よさ」(「とてもそう思う」+「そう思う」の合計)

- (a)自然が豊か(164人) (b)人柄がよい(128人) (c)住民をよく知っている(118人)

イ 地域の「課題」(「とてもそう思う」+「そう思う」の合計)

- (a)高齢化(164人) (b)少子化(160人) (c)職場が少ない(156人) (d)交通手段(134人)

ウ 日ごろ、地域の子どもと接すること(「ほとんどない」の人数)

- (a)中学生(96人) (b)保育園児(93人) (c)小学生(87人)

エ 今後、学校への要望として(複数回答)

- (a)地域に対する児童生徒たちの意見を聞く機会や場をもっとつくってほしい(36人)

表7 振り返りシートの集計(第2学年、10月1名欠席)

| 時期 | 項目 | 『自分がだれかの役に立てた』とか『うれしい』と思える ことがありましたか？(第2学年) | |
|-----|-----|------------------------------------------------|-------------------------|
| | 選択肢 | 「たくさんあった」 「少しあった」 | 「あまりなかった」 「ぜんぜんなかった」 |
| 10月 | | 5人 | 8人 |
| 11月 | | 9人 | 5人 |

表8 振り返りシートの集計(第2学年、10月1名欠席)

| 時期 | 項目 | 小学生に、自分から声をかけたり誘ってあげたりすることが できましたか？(第2学年) | |
|-----|-----|----------------------------------------------|-------------------------|
| | 選択肢 | 「よくできた」 「まあまあできた」 | 「あまりできなかった」 「できなかった」 |
| 10月 | | 8人 | 5人 |
| 11月 | | 12人 | 2人 |

表9 振り返りシートの集計(第5学年)

| 時期 | 項目 | 今日の活動から、自分も下級生に対してお世話してあげ たいという気持ちになれましたか？(第5学年) | | | |
|-----|-----|-----------------------------------------------------|---------------|-----------------|--------------|
| | 選択肢 | 「なった」 | 「まあまあ なった」 | 「あまりなら なかった」 | 「ならなかつ た」 |
| 7月 | | 0人 | 3人 | 1人 | 0人 |
| 10月 | | 1人 | 2人 | 1人 | 0人 |
| 11月 | | 2人 | 1人 | 1人 | 0人 |

5 まとめ

(1) 成果

- ① 小・中学生の異年齢交流の活動が、児童生徒の一人一人が育つ場となり、人間関係の広がりにつながった。

従来の小・中合同の行事に加え、児童生徒が、日々の生活の中でのかかわりを通して成長すると共に、児童生徒と教職員の双方にとって、「小・中学校間のつながり」になった。

- ② 異年齢交流の活動を体験することで、児童生徒の自己有用感がはぐくまれた。

年齢差を生かした活動は、児童生徒にとって、自己有用感の獲得につながり、他者に対する積極的、主体的な行動や配慮が高まるなど、対人関係能力の育成につながると言えた。今後は、小学校低学年、さらには保育園を視野に入れた取組に発展させたい。

- ③ 人間関係づくりの取組の実施・継続で、他者受容が促進された。

小規模の集団においても、言動や存在が認められることで、一人一人の自信につながった。そこから他者への積極的、主体的なかかわりが増えるとともに、他者受容の促進につながった。

- ④ 地域の実態、地域の方の思いを知ることで、実態に応じた取組の提案につながった。

地域の実態や思いを共有することが、地域と学校との協働に向けた学校づくり、地域づくりへの土台づくりには不可欠であると言える。

(2) 今後の課題

- ① 「ピア・サポート・プログラム」の考え方をさらに推進し、小・中学校間の共通理解を深める。

小・中連携を系統だてた取組にするために、具体的な活動の普及、促進とともに、年間指導計画の検討や合同職員会の開催など、一層の共通理解を図る手立てを検討する。

- ② 小・中学校間が遠距離の場合、あるいは中学校区に複数の小学校がある場合の連携の在り方。

時間設定や移動手段・時間など、地域による様々な条件の違いに対し、小・中学校間だけでなく、地域全体での共通理解を深め、実態に応じた手立てを検討する必要がある。

- ③ 地域の方と児童生徒が、直接かかわり合うことができる場の設定。

地域の願いを踏まえ、新たに創ることも必要だが、まず現状の体制をもとに、少しずつその活動の範囲を広げていくことが重要である。

6 おわりに

過疎化の進行する高知県の中山間地域において、山村留学制度を取り入れつつ、地域として学校づくりを考えている小規模校での実践は、今後の人間関係づくりの取組とその在り方を、根底から見つめ直す機会となった。その中で、この1年間、こうした学びの機会を与えていただき、地域の実態に応じた取組の重要性を改めて確認できたことを、今後は中山間地域だけでなく、広く小・中学校で活用できるよう、実践を重ねると同時に、さらに研究を進めたいと考えている。

最後に、本研究の実施にあたり、大変お世話になった教育事務所や関係機関の方々、小・中学校の教職員の方々、そして調査に協力していただいた地区長をはじめ地域の方々など、すべての方に深く感謝をする。

【引用文献】

- 1 滝充 「改訂新版 ピア・サポートではじめる学校づくり～中学校編」 金子書房 2004年
- 2 滝充 「ピア・サポートではじめる学校づくり～実践導入編」 図書文化 2002年
- 3 宮城県教育委員会 「宮城県教育研修センター教育相談班作成 相談班質問紙」
(「豊かな人間関係を育てる生徒指導の実践的研究」－3年次－) 2000年
- 4 高知県教育委員会小中学校課 「平成19年度 市町村(学校組合)別公立小中学校教一覧表」 平成19年
- 5 Benesse 教育研究開発センター 「第1回子ども生活実態基本調査」 2004年
- 6 プロジェクトアドベンチャージャパン 「グループのちからを生かすー成長を支えるグループづくりー」
C. S. L. 2005年